【343】

氏　名（本籍）	新　保　　哲（しんぽ　さとる）（新 潟 県）
学 位 の 種 類	博　　士（文　　学）
学 位 記 番 号	博　乙　第　2089　号
学位授与年月日	平成 17 年 2 月 28 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	**鎌倉期の念仏思想と禅思想の研究** －法然・親鸞・覚如・道元とキリスト教の比較研究を主軸として－

主　査	筑波大学教授	文学博士	伊　藤　　益
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	河　上　正　秀
副　査	筑波大学助教授	Dr. phil.	小　野　　基
副　査	筑波大学助教授	文学博士	佐　藤　貢　悦

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は，鎌倉期の浄土教の祖師の一人親鸞を取り上げ，龍樹・天親・曇鸞・道綽・善導・源信・法然という浄土教の思想的な系譜のなかで彼が占める位置をあきらかにするとともに，比較論的な視座に立って，親鸞思想の核心をキリスト教との対比のもとに闡明するものである。本論文の比較論的な視座は，さらに，道元の禅思想とキリスト教思想とを対照しつつ，前者の特長を浮き彫りにすることにもつながっている。

本論文は，六部から成る。すなわち，総序，第一部「親鸞の他力思想」，第二部「親鸞の根本思想と人格的理想的人間像」，第三部「念仏とキリスト教の口称に関する比較研究」，第四部「禅とキリスト教の比較研究」，後序というもので，末尾に参考文献資料一覧表を付している。

総序は，本論文全体の構想と眼目とを包括的に述べるもので，本論文の基軸が第一部と第二部とに存すること，すなわち，ときに禅思想やキリスト教思想にも目配りしつつ，浄土教の親鸞思想に基づく展開過程を追うことに，論考全体の主眼があることをあきらかにする。したがって，第三部，第四部は，補論的な部分として位置づけられる。しかし，それは，両部が単に付録的な部分にとどまることを意味するわけではない。総序によれば，第三部，第四部は第一部と第二部の論点を補強する論拠を構築していることが分かる。

第一部「親鸞の他力思想」は，まず，親鸞が自力往生の無効性を説いたことをあきらかにし，その際，彼が主として龍樹の『十住毘婆沙論』と曇鸞の『浄土論注』に依拠しつつ，主著『教行信証』の「行巻」「信巻」「証巻」や『尊号真像銘文』などの他力論の論脈を構築していったことに論及する。本論文によれば，とくに往相・還相二種廻向という思想や「如来の本願力」を浄土教の根幹とする認識などに関して，親鸞は，曇鸞の思索を踏襲する立場に立っているという。もとより，親鸞の思想的核心に，天親，道綽，善導，源信，法然からの影響が存することは否定できないけれども，すくなくとも他力論に関しては，曇鸞からの影響が最も大きいと本論文は主張する。第一部の論究は，さらに，『一念多念文意』『唯信鈔文意』『末燈鈔』『歎異抄』などの，親鸞自身の手に成る文献もしくは親鸞に密接に関わる文献を手がかりとして，自力と他力との決定的な相異点にも説き及び，およそつぎのように説く。すなわち，他力は親鸞思想の初発の段階から明確に自力と

分かたれていたものではなく，自力を尽くした果てにもはや如何ともなしがたい情況に立ち至った人間が弥陀の不可思議な力によって救済へともたらされることが他力として意識され，そのことによってはじめて自力と他力の区別が明確化されたのだ，と本論文は説く。

第二部「親鸞の根本思想と人格的理想的人間像」は，絶対的ともいうべき念仏の功徳に信を置く点に親鸞の根本思想が存することを浮き彫りにするとともに，そうした根本思想を有する親鸞という一人格が，没後，覚如や蓮如の著作，あるいは江戸期の節談説教などをとおして，理想化されてゆく経緯を克明に追う。それによれば，親鸞は越後への流罪を機として，一個の求道者から衆庶のあいだに念仏の教えを広めるという普遍的な主題を担った宗教者へと変貌した。そのことを顧慮するとき，『御伝鈔』や『親鸞聖人御一代記』などに見える，人間の生死の問題に深く関わり，そうした問題への解決法を平易な言説によって民衆に語り伝える親鸞像は，たしかに若干の誇張が見られるものの，親鸞の実像から大きく乖離するとは考えられない，と本論文は指摘する。さらに，第二部では，「願船」「願海」という親鸞の根本概念への論究が試みられ，こうした概念が親鸞以前の浄土教にはほとんど見られないことから，それらが，越後流罪という親鸞の宗教家としての原体験に由来するという認識が披瀝される。

第三部「念仏とキリスト教の口称に関する比較研究」においては，キリスト教の宗教的実践の根幹をなす「主の御名を唱える」ことと，浄土教における口称の念仏とが比較考究され，つぎのような論が導かれる。すなわち，「主の御名を唱えること」と口称の念仏とは，ともに唱える主体としての自己が救済されたことを確認する行為であり，両者に見られる，単調で正確なリズムによる心身機能の高揚は，両者が祈りの対象を異にしつつも質的に近似することを示しているという。

第四部「禅とキリスト教の比較研究」は，禅，とくに道元の清浄観と，キリスト教，とくにパウロの清浄観とを比較し，道元のそれが，禅において伝統的な「身心脱落」を敢えて「心塵脱落」と読み替える視点から構築されていることを明らかにし，それと見神の前提として心身の清浄を説くパウロの清浄観とが類を等しくすることを強調する。道元が意図的に「見心脱落」を「心塵脱落」と読み替えたという説は，すでに先行研究によって指摘されているが，本論文はそうした先行研究を踏まえながら，比較論的視点を導入することによって，清浄観の普遍性に説き及んでいる。

後序は，総序から第四部までの論究を簡潔に要約するとともに，本論文全体の意義を鮮明にするものである。すなわち，後序によれば，まず第一に，本論文は，「願船」「願海」という語にこめられた親鸞の思想が，単に浄土教の伝統を踏襲するだけのものではなく，越後流罪という彼の宗教的原体験を表象するものでもある点を闡明しえた点に意義をもつ。第二に，本論文は，覚如以下親鸞没後の思想家たちの提示する親鸞像が実像から乖離した虚像にはとどまらないこと，すなわち，それが一面において親鸞思想の核心に肉薄するものであった点を解明するものでもあった。さらに，第三に，浄土教の根幹ともいうべき「口称」の構造を心身両面に関わるものとして示した点に，また，第四に，清浄観の，洋の東西にわたる普遍的な姿を闡明しえた点に，本論文の独自の論たる性格が存することを，後序は明らかにしている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は，親鸞の著作とくに『教行信証』を考察の中心に据えて，親鸞思想の意義をあきらかにするとともに，覚如や蓮如などが親鸞像をいかに構築していったか，またそうした親鸞像が実像に適合するか否かを追究している。その際本論文が採択する方法は，文献の内在的考究という，正統な方法である。本論文において別途採択される比較論的方法も，原典の考察を基調とする。そうした方法のもとに展開される本論文の論究は，およそ以下の点において創見を示す。

従来の研究は，親鸞自身の文脈から親鸞の思想を汲み取ることに急なあまり，ともすれば，後世の諸文献

が描く親鸞像を荒唐無稽な贅語と見なし，その存在意義を過小評価する傾向にあった。それに対して，本論文は，後世の文献，わけても江戸期以降の節談説教や『親鸞聖人御一代記』などにも焦点を当て，さらに，親鸞の二十年にわたる関東での布教活動の意味とそれらの文献とを照らし合わせることによって，後世の親鸞像が単なる捏造にはとどまらないことを明瞭にする。すなわち，本論文によれば，後世の文献には多くの誇張が見られるけれども，それらに描かれる親鸞像は，生死の根幹に関わる念仏の教えを衆庶に懇切かつ平易に説き聞かせた親鸞の実像をある程度まで的確に伝えるものである，という。本論文は，後世史料を，歴史的親鸞像の解明のために用いることよりも，むしろ，それらを親鸞の思想内容の理解に資するものとして位置づけることをめざす。このような，従来の研究において看過されがちであった試みを遂行する点において，本論文の成果には顕著なものがある。

また，本論文は，親鸞の手に成る「和讃」を精読することによって，親鸞が功徳の在りようを「弘誓一乗海」「海水の一味」「功徳大宝海」などと表現していることをあきらかにする。そのうえで，親鸞以前の浄土教文献を精査しつつ，本論文は，功徳を「海」に譬える言説が，おおむね親鸞に特化されるものであることを闡明する。さらに，そうした「海」の譬喩が親鸞の宗教的原体験にねざすものである，と本論文は主張する。すなわち，本論文によれば，承元の法難に連座し越後に配流されたとき，日本海の広大な荒海に接した親鸞は，生涯その折りの衝撃を忘れえず，やがて，海の広大無辺な自然力を弥陀の功徳に譬える手法を身につけたのだ，という。これは，著者の実存的な体験と親鸞のそれとが絡みあうことによって生みだされた，斬新な指摘である。親鸞が，ただ「日本海」の青海原のみを念頭に置きながら，弥陀の功徳を海に譬えたことを文献的に立証するのは容易ではない。しかし，親鸞の思想的原点の一つが越後流罪という事件に存することは確実であり，この点から見て，本論文の指摘は，首肯されるべきものといえよう。

本論文は，以上の諸点において，新知見を披瀝し，学界に貢献する成果をおさめている。さらに，浄土教（念仏）とキリスト教，あるいは禅とキリスト教という視座からの二つの比較論的研究（第三部，第四部）も，それらを，それぞれ，「口称と祈りの意義」，「清浄観の普遍性」を闡明するものという視点から見るならば，学界に寄与するものと認められる。ただし，著者のキリスト教理解は，その，浄土教の考察や禅の考究に比べて平板である。堅実な文献精査の方法とあわせて，実存的な手法をも駆使する著者が，キリスト教を自身が生きる現場において，いかにいきいきととらえなおしてゆくのか。そこに，著者にとっての今後の課題が存する。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。